

博士論文

論文題目 討債鬼故事の成立と展開
—我が子が債鬼であることの発見—

氏 名 福田 素子

討債鬼故事の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—

目次

緒論	討債鬼故事とは何か	1
	一 はじめに	1
	二 先行研究について	4
	三 先行研究の問題点	5
	四 この研究の目指すもの	6
	五 各章の梗概	7
	注	11
第1章	六朝・唐代小説中の転生復讐譚	14
	一 はじめに	14
	二 本生譚・仏教經典における輪廻	14
	三 中国における亡霊復讐譚	16
	1 輪廻を含まない亡霊復讐譚	16
	2 顔之推『冤魂志』について	18
	3 輪廻を取り入れた復讐譚（一）—六朝—	19
	4 輪廻を取り入れた復讐譚（二）—唐代—	19
	四 まとめ	22
	注	22
第2章	討債鬼故事の成立 —「党氏女」—	24
	一 はじめに	24
	二 転生復讐譚その一～鳩摩羅什訳『衆經撰雜譬喻經』「嫉妬話」について	24
	三 転生復讐譚その二～薛用弱『集異記』「阿足師」について	26
	四 現存最古の討債鬼故事「党氏女」について	29
	1 「党氏女」とその類話について	29
	2 「党氏女」から宋代以降の討債鬼故事へ	34
	3 「党氏女」と「阿足師」の比較—復讐に対するスタンスの違い—	36
	五 まとめ	37
	注	38
第3章	偽經『仏頂心陀羅尼經』と討債鬼故事	40

一	はじめに	40
二	『仏頂心陀羅尼經』の内容と成立	41
	1 『仏頂心陀羅尼經』の内容	41
	2 『仏頂心陀羅尼經』についての先行研究	42
	3 『仏頂心陀羅尼經』は何処で成立したか—金石学資料からの考察—	43
	4 『仏頂心陀羅尼經』下巻第三話と討債鬼故事	45
	補 下巻第四話について	47
三	『仏頂心陀羅尼經』の写経活動	52
	1 文献に見える写経活動	52
	2 版本に見る『仏頂心陀羅尼經』の信仰形態	56
	3 台湾中央研究院傅斯年図書館と北京国家図書館所蔵の拓本に見る金代の石刻群	59
四	まとめ	66
附：	『仏頂心陀羅尼經』の主なテキスト	67
	注	70
第4章	雑劇『崔府君断冤家債主』と討債鬼故事—討債鬼故事の転換点—	74
一	はじめに	74
二	『崔府君断冤家債主』のテキストについて	74
三	『崔府君断冤家債主』の作者と成立年代	75
	1 文献の記載について	75
	2 劇中の地名について	76
	3 劇中の貨幣について	77
	4 神仙道化劇と『崔府君断冤家債主』	77
	5 成立年代考証のまとめ	78
四	『崔府君断冤家債主』と討債鬼故事	78
	1 『崔府君断冤家債主』の原話について	78
	2 『崔府君断冤家債主』に見える討債鬼故事の要素	79
	3 A T 四七一 B 「老父陰曹尋子」と『崔府君断冤家債主』	80
五	まとめ	85
	注	86
第5章	落語「もう半分」に見る討債鬼故事の受容と変容	89
一	はじめに	89
二	討債鬼故事の日本への伝来	90

	1 日本の討債鬼故事受容についての先行研究	90
	2 近世の作品群	90
三	「もう半分」に見る討債鬼故事の変容	92
	1 「もう半分」の先行作品	92
	2 「もう半分」の類話—落語「正直清兵衛」と漢文小説「鬼 児」—	93
	3 「もう半分」の各要素の検討	96
	< 1 > 子供の容貌について	96
	< 2 > 異形の者への変貌	96
	< 3 > 「娘を売った金」ということ	98
四	まとめ	100
注		100
結語		103
注		104
附：	中国における討債鬼故事及び関連作品表	105
参考文献一覧		108

本文

以下の書籍の出版契約により、博士論文本文は公開出来ない。

著者名	福田素子
書名	債鬼転生—討債鬼故事に見る中国の親と子—
出版社	株式会社知泉書館
出版年	2019 年
ISBN	ISBN 978-4-86285-307-3

参考文献一覧

- ・参考文献は、内容について言及したものを章別に紹介する。複数の章でまたがって使用している場合は、それぞれの章に配置した。
- ・章内では、原典資料(中→日)単行本(中→日)論文(中→日)の順に排列する。

緒論 討債鬼故事とは何か

- 後漢・安玄・嚴仏調訳『阿含口解十二因縁経』（『大正新脩大蔵経』第二十五冊）
後秦・鳩摩羅什訳『衆経撰雜譬喻経』（『大正新脩大蔵経』第四冊）
唐(?)・王梵志著・項楚校注『王梵志詩校注』（上海古籍出版社 二〇一〇）
宋・李昉等撰『太平広記』（中華書局 一九六一）
清・彭定求等撰『全唐詩』（明倫出版社 一九七一）
清・蒲松齡撰・任篤行輯校『全校会註集評聊齋志異』（齊魯書社 二〇〇〇）
清・袁枚撰『新齊諧・続新齊諧』（人民文学出版社 一九九六）
- 老舎「駱駝祥子」『老舎全集 3』（人民文学出版社 二〇一三）
張愛玲「桂花蒸・阿小悲秋」『張愛玲全集 5 回顧展。I 張愛玲短篇小説集之一』（台湾皇冠叢書 一九九二）
汪曾祺『汪曾祺經典作品』（当代世界出版社 二〇一一）
李碧華『凌遲』（天地圖書 二〇〇一）
莫言『蛙。』（麦田出版 二〇〇九）
- 林蘭編『灰大王』（北新書局 民間故事叢書一 一九三二）
蔡俟明編著『潮語詞典』（一九七六）
丁乃通『中国民間故事類型索引』（中国民間文芸出版社 一九八六）
文彦生『中国鬼話』（上海文芸出版社 一九九一）
吳連生他編『吳方言詞典』（漢語大詞典出版社 一九九五）
朱彰年他編『寧波方言詞典』（漢語大詞典出版社 一九九五）
費孝通『生育制度』（北京大学出版社 一九九八）
陳宗顯『台湾人生諺語』（常民文化 二〇〇〇）
金榮華『民間故事類型索引』（中国口伝文学学会 二〇〇七）
- 永尾龍造『支那民俗誌』（支那民俗誌刊行会、一九四二）
澤田瑞穂『鬼趣談義』（中央公論社中公文庫 一九九八）
馬場英子・瀬田充子・千野明日香編訳 東洋文庫七六二『中国昔話集二』（平凡社阿東洋文

庫七六二 平凡社 二〇〇七)

丸山顕徳『『日本霊異記』の討債鬼説話と食人鬼説話』(丸山顕徳ほか編『論集 古代の歌と説話』和泉書院 一九九〇)

後小路薫「近世説話の位相—鬼索債譚をめぐって—」(井上敏幸ほか編『元禄文学を学ぶ人のために』世界思想社 二〇〇一)

第1章 六朝・唐代小説中の転生復讐譚

『春秋左伝正義』(『十三経注疏』第六冊 二〇〇一)

後秦・鳩摩羅什訳『衆経撰雜譬喻経』(『大正新脩大蔵経』第四冊)

北魏・慧覺等訳『賢愚経』(『大正新脩大蔵経』第四冊)

晋・干宝撰・汪紹楹注『搜神記』(中華書局 一九七九)

梁・慧皎撰『高僧伝』(『大正新脩大蔵経』第五十冊)

唐・張鷟『朝野僉載』(『隋唐嘉話 朝野僉載』中華書局 一九七九 所収)

唐・戴孚『冥報記・広異記』(古小説叢刊 中華書局 一九九二)

宋・李昉等『太平御覧』(中華書局 一九六〇)

宋・李昉等『太平広記』(中華書局 一九六一)

王国良『顔之推冤魂志研究』(文史哲出版社 一九九五年)

王青『西域文化影響下的中古小説』(中国社会科学出版社 二〇〇六)

小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』(東京大学出版会 一九七三)

森三樹三郎『中国思想史』下(第三文明社 一九七八)

中村元監修・補註『ジャータカ全集』全十卷(春秋社 一九八二～九一)

早島鏡正監修／高崎直道編『仏教・インド思想辞典』(春秋社 一九八七)

辻直四郎『ウパニシャッド』(講談社学術文庫 一九九〇)

吉川忠夫『中国人の宗教意識』(創文館 一九九八年)

第2章 討債鬼故事の成立 —「党氏女」と「阿足師」

後秦・鳩摩羅什訳『衆経撰雜譬喻経』(『大正新脩大蔵経』第四冊)

北涼・曇無讖訳『大般涅槃経』(『大正新脩大蔵経』第十二冊)

唐・牛僧孺・李復言撰・程毅中点校『玄怪録 続玄怪録』(中華書局出版 一九八二)

唐・牛僧孺・李復言撰・程毅中点校『玄怪録 続玄怪録』(中華書局出版 二〇〇六)

唐・義浄『根本説一切有部毗奈耶雜事』(『大正新脩大蔵経』第二十四冊)

宋・李昉等『太平広記』(中華書局 一九六一)
宋・洪邁『夷堅志』(中華書局 一九八一)
宋・郭彖『睽車志』(徐凌雲・許善述点校『唐宋筆記小説三種』黄山書社 一九九一)
宋・贊寧『宋高僧伝』(『大正新脩大藏經』第五十冊)
黄覺修等纂『新修閩郷県志』(『中國方志叢書』華北地方 第一一九号 台北成文出版社 一九六八)

中村元『尼僧の告白』(岩波文庫 一九八二)

李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』(南開大学出版社 一九九三)

長谷川兼太郎『滿蒙鬼話』(長崎書店 一九四一)
布目潮颯・栗原益男『中国の歴史四・隋唐帝国』(講談社 一九七四)
澤田瑞穂『仏教と中国文学』(国書刊行会 一九七五)
森三樹三郎『中国思想史』下(第三文明社 一九七八)
中田祝夫『日本靈異記』(小学館 完訳日本の古典 一九八九)
多賀浪砂『干宝『搜神記』の研究』(近代文芸社 一九九四)
景戒撰・出雲路修校注『日本靈異記』(岩波書店 新日本古典文学大系 一九九六)

第3章 偽經『仏頂心陀羅尼經』と討債鬼故事

唐・玄奘『大唐西域記』(『大正新脩大藏經』第五十一冊)
唐・智通訳『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』(『大正新脩大藏經』第二十冊)
唐・菩提流志訳『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經』(『大正新脩大藏經』第二十冊)
項楚『敦煌變文選注』(中華書局 二〇〇六)
宋・劉斧撰『青瑣高議』(宋元筆記叢書 上海古籍出版社 一九八三)
宋・王欽若等編『冊府元龜』(鳳凰出版社 二〇〇六)
宋・敏求編『唐大詔令』(中華書局 二〇〇八)
宋・洪邁『夷堅志』(中華書局 一九八一)
元・脱脱等撰『遼史』(中華書局 一九九七)
元・脱脱等撰『金史』(中華書局 一九九七)
明・解縉等『永樂大典』(中華書局 一九六〇～八四)
明・蘭陵笑笑生『金瓶梅詞話』(中国図書刊行社 一九八六)
明・郭良翰撰『明諡紀彙編』(『四庫全書珍本』第二集五〇三～八 商務印書館 一九七一)
清・吳式芬撰『金石彙目分編』(『石刻史料新編』二七・八冊 新文豐出版公司 一九七七)
清・繆荃孫撰『芸風堂金石文字目』(『石刻史料新編』二六冊 新文豐出版公司 一九七七)

- 陳述『全遼文』(中華書局 一九八二)
- 北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』(中州古籍出版社 一九八九～九一)
- 陳燕珠『房山石経中遼末與金代刻経之研究』(覺苑出版社 一九九五)
- 胡孚琛主編『中華道教大辞典』(中国社会科学出版社出版 一九九五)
- 李劍国『宋代志怪伝奇叙録』(南開大学出版社 一九九七)
- 季羨林 主編『敦煌学大辞典』(上海辞書出版社 一九九八)
- 国家図書館善本金石組編『歴代石刻資料彙編』(北京図書館出版社 二〇〇〇)
- 林世田・申国美編『敦煌密宗文献集成』上(中華全国図書館文献縮微複製中心 二〇〇〇)牛汝極『回鶻仏教文献・回鶻漢訳疑偽仏経』(新疆大学出版社 二〇〇〇)
- 劉春銀, 王小盾, 陳義主編『越南漢喃文献目錄提要』(中央研究院中国文哲研究所 二〇〇二)
- 閻鳳梧主編『全遼金文』(山西古籍出版社 二〇〇二)
- 浙江省博物館編『浙江省博物館典藏大系 東方仏光』(浙江古籍出版社 二〇〇八)
- 楊宝玉『敦煌本仏教靈驗記校注並研究』(甘肅人民出版社 二〇〇九)
- 「文物工作報導」(『文物』一九五九年第十期)
- 鄭阿財『敦煌写本「仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼経」研究』(『敦煌学』二十三輯、二〇〇一)
- 牧田諦亮『偽経研究』(京都大学人文科学研究所 一九七六)
- 日本靈異記研究会編『日本靈異記の世界』(三弥井書店 一九八二)
- 萩谷朴『枕草子解環』(同朋舎 一九八三)
- 『高山寺経蔵古目錄』(東京大学出版会 一九八五)
- 説話研究会編『真言伝：対校』(勉誠社 一九八八)
- 上山大峻『敦煌仏教の研究』(法藏館 一九九〇)
- 景戒撰・出雲路修校注『日本靈異記』(岩波書店 新日本古典文学大系 一九九六)
- 西田龍雄『西夏王国の言語と文化』(岩波書店 一九九七)
- 福井玲『小倉文庫目錄』(『朝鮮文化研究』第九号 二〇〇二)
- 白須浄真『敦煌における「回向輪経」の伝承—吐蕃支配期の中原未伝漢訳経典の研究—』(『仏教史学研究』第十七卷一号 一九七四)
- Eric Grinstead ‘The Tangut Tripitaka’ (New Delhi Sharada Rani 序文は一九七一・刊行年は記載なし)

第4章 雜劇『崔府君断冤家債主』と討債鬼故事—討債鬼故事の轉換点—

- 宋・洪邁『夷堅志』(中華書局 一九八一)
- 元・無名氏『湖海新聞夷堅統志』(中華書局 一九八六)
- 元・鍾嗣成『録鬼簿』(『録鬼簿(外四種)』(古典文学出版社 一九五七))
- 無名氏『崔府君断冤家債主』(『古本戯曲叢刊』(中華書局 一九六四)四集第三函『脈望館鈔本校本古今雜劇』十九冊／明・臧懋循編『元曲選』(中華書局 一九五八)／『全元曲』卷二(河北教育出版社 一九九八))
- 明・宋濂等撰『元史』(中華書局 一九九七)
- 明・凌蒙初『拍案驚奇』(上海古籍出版社 一九八二)
- 明・無名氏『録鬼簿統編』(『録鬼簿(外四種)』(古典文学出版社 一九五七))
- 明・甯献王『太和正音譜』(『録鬼簿(外四種)』(古典文学出版社 一九五七))
- 明・陸粲『庚巳編』(中華書局 一九八七)
- 明・智旭『見聞録』(『統藏經』第一四九冊)
- 明・顔茂猷輯『迪吉録』(『四庫全書存目叢書』(齊魯書社 一九九五～七 子部第一四九冊所収)
- ？『繪図三教源流搜神大全：附搜神記』(聯経出版事業公司 一九八〇)
- 清・蒲松齡・任篤行輯校『全校会註集評聊齋志異』(齊魯書社 二〇〇〇)
- 清・黄文暘『曲海総目提要』(北京人民出版社 一九五九)
- 清・張廷玉等撰『明史』(中華書局 一九九七)
- 清・鄭烺『崔府君祠録』(『中国道観志叢刊統編』十五 揚州広陵書社 二〇〇四)
- 陳鶴儕等纂修『濰県志』(新修方志叢刊八七 台湾学生書局 一九六八)
- 凌純声・芮逸夫『湘西苗族調査報告』(上海商務印書館 一九四七)
- 王国維『宋元戯曲考』(一九一二)(『王国維戯曲論文集』中華戯曲出版社 一九五七)
- 嚴敦易『元劇斟疑』(中華書局 一九六〇)
- 丁乃通『中国民間故事類型索引』(中国民間文芸出版社 一九八六)
- 杜金鵬等編著『中国古代酒具』(上海文化出版社 一九九五)
- 青木正児著「元人雜劇序説」(『青木正児全集』第四卷 春秋社 一九六九～七五)
- 田中謙二『戯曲集上』(平凡社古典文学大系 一九七〇)
- 吉田隆英「崔小玉と崔府君信仰」(『集刊東洋学』二九 一九七三)
- 中鉢雅量「神仙道化劇の成立」(『日本中国学会報』第二十八集 一九七六)
- 福満正博「元雜劇中の度脱劇試論」(『日中學會報』第四十二集 一九九〇)
- 高橋文治「崔府君をめぐる一元代の廟と伝説と文学一」(『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』 汲古書院 一九九一)
- 田仲一成『中国演劇史』(東京大学出版会 一九九八)
- 馬場英子・瀬田充子・千野明日香編訳 東洋文庫七六二『中国昔話集二』(平凡社 二〇〇〇)

七)

第5章 落語「もう半分」に見る討債鬼故事の受容と変容

北涼・曇無讖訳『大般涅槃經』(『大正新脩大藏經』第十二冊)

宋・郭彖『睽車志』(徐凌雲・許善述点校『唐宋筆記小説三種』黄山書社 一九九一)

明・凌蒙初『二刻拍案驚奇』(上海古籍出版社 一九九四)

清・蒲松齡・任篤行輯校『全校会註集評聊齋志異』(齊魯書社 二〇〇〇)

清・袁枚『新齊諧・続新齊諧』(人民文学出版社 一九九六)

老舍「駱駝祥子」『老舍全集 3』(人民文学出版社 二〇一三)

張愛玲著「琉璃瓦」(『張愛玲典藏全集』五 皇冠文化出版有限公司 二〇〇一)

石川鴻齋戯編『夜窓鬼談』(吾妻健三郎 一八八九)

『百花園』第二百二十八号(一八九九)

『文藝俱樂部』第十九卷十四号定期増刊(一九一三)

『善悪むくいばなし』吉田幸一『近世怪異小説』(古典文庫 一九五五)

暉峻康隆・興津要・榎本滋民編『口演速記明治大正落語集成』(講談社 一九八〇～一)

『久夢日記』(『続日本随筆大成』別卷近世風俗見聞集 卷五吉川弘文館 一九八二)

西田耕三編『仏教説話集成』一(国書刊行会 一九九〇)

五代目 古今亭志ん生『子別れ／もう半分』(ビクター 二〇〇一)「もう半分」は一九六六年三月三十一日於東宝演芸場録音

井原西鶴『本朝二十不孝』卷三「当社の案内申す程をかし」(一六八六)(岩波書店 新日本古典文学大系七十六 一九九一 勉誠出版 新編西鶴全集第二卷 二〇〇二)

浅井了意『浅井了意全集 仏書編』一(岩田書院 二〇〇八)

『隔週刊 CD つきマガジン 落語 昭和の名人決定版十八 五代目古今亭今輔 二代目三遊亭円歌』(小学館 二〇〇九) 昭和三十四年七月三十一日文化放送「怪談五話」より。

棕梨一雪『続著聞集』(『假名草子集成』卷四十五 東京堂出版 二〇〇九)

滋賀秀三『中国家族法の原理』(創文社 一九七六)

溝口雄三『中国の公と私』(研文出版 一九九五)

延広真治編『落語の観賞二〇一』(新書館 二〇〇二)

西本晃二『落語『死神』の世界』(青蛙房 二〇〇二)

石川鴻齋著／小倉齊・高柴慎治訳注『夜窓鬼談』(春風社 二〇〇三)

丸山顕徳『『日本霊異記』の討債鬼説話と食人鬼説話』(丸山顕徳ほか編『論集 古代の歌と説話』和泉書院 一九九〇)

中込重明「落語「もう半分」と「疝気の虫」の形成」『法政大学大学院紀要』第三十号(一九九三)

後小路薫「近世説話の位相—鬼索債譚をめぐって—」(井上敏幸ほか編『元禄文学を学ぶ人のために』世界思想社 二〇〇一)

結語

留用光伝授・蔣叔輿編次『无上黄籙大齋立成儀』(『正統道藏』第十五冊)

付録の「中国における討債鬼故事及び関連作品表」を作成する際には、上で挙げた原典資料の他、『筆記小説大観』(新興書局 一九六二)及び『筆記小説大観続編』(新興書局 一九六二)などを用いた。

論文の内容の要旨

論文題目：

討債鬼故事の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—

氏名：福田素子

討債鬼故事とは、中国に古くから伝わる怪談の一種である。

その粗筋は、金を奪われたり、借金を踏み倒されたりした者が、加害者（あるいはその生まれ変わり）の子供に転生して、奪われたり、踏み倒されたりした金額だけ親の金を蕩尽したところで早死にするという話である。

討債鬼故事は、唐代中期に成立して以降、文言・白話の小説や戯曲の題材として多くの作品を生み、現代・当代文学でもしばしば取り上げられている。また文学作品としてだけでなく、親に苦勞をかける子を、親が「討債鬼」と呼んで罵るという習俗が、現在も華

人社会に広く定着している。

討債鬼故事は、中国人にとっての親子観や金銭観を考える上で重要な問題を多く含む一方で、輪廻という外来の生命観の受け入れなくしては成立し得なかった物語である。

本研究は、本生譚の中で輪廻がどのように描かれているかを出発点とし、それが中国の文学に取り込まれ、唐代にいたって討債鬼故事が成立するまでの過程を探る。次に、文学作品としての討債鬼故事に生じた歴史的变化を論じ、「転生して復讐する」という観念が中国社会にもたらした信仰や習俗について概観する。最後に日本における受容と変容を、落語「もう半分」を題材にして考察し、日本の作品との比較によって、討債鬼故事の背後にある家族観や金銭観を明らかにする。

「第1章、六朝・唐代小説中の転生復讐譚」

討債鬼故事の現存最古の例と目される作品は、唐・牛僧孺『玄怪録』所収「党氏女」であるが、それまでの中国文学の中にはこれに類する作品を見出すことが出来ない。本章では、これより以前の仏典や志怪小説中の作品をもとに、輪廻と復讐の関係について検討を加える。

転生して復讐する物語は、本生譚にも存在していたが、輪廻の行き先を選ぶには、生前口に出して復讐を誓わねばならず、しかも復讐を遂げた後、復讐者は自分の行為を後悔することになった。仏教は復讐という行為を肯定しなかったのである。一方漢代に仏教が伝来する以前から、中国には亡霊復讐譚があり、復讐を正義の実現として肯定する立場をとっていた。復讐に対する見方の違いから、六朝志怪の復讐譚に輪廻が取り入れられることはなかったが、仏教文学である『高僧伝』に、「前世の因縁に操られ、自分の意志に反して復讐する」という奇妙な復讐譚が登場し、同様の話が唐代の小説にも取り入れられる。また、唐代には自分の意志で来世を決定する話が描かれるようになり、討債鬼故事が成立する条件が整っていく。

「第2章、討債鬼故事の成立 — 「党氏女」と「阿足師」

本章では、現存最古の討債鬼故事である「党氏女」と、南北朝期と唐代に作られた「党氏女」とは異なるタイプの転生復讐譚とを比較し、それぞれに描かれた転生と復讐の違いを論じる。

後秦・鳩摩羅什訳『衆経撰雜譬喻経』所収の「嫉妬話」は、息子を殺された妾が、殺害者である妻の子供に転生しては夭折を繰り返して復讐する話であり、借金の要素は無いものの、討債鬼故事の前段階の作品として注目される。同時代にはこれに類する作品は残っ

ていないが、中唐期になり、類似した展開を持つ作品が複数現れる。薛用弱撰『集異記』佚文「阿足師」、『仏頂心陀羅尼經』下卷第三則、そして日本の『日本靈異記』中卷第三十縁の三作品である。

これらの説話は、借金についての記述を含まず、また復讐者は調伏され、復讐を遂げることが出来ない。厳密には討債鬼故事とは言えないが、後世にはこの型の話も、討債鬼故事として受容されている。

「党氏女」は、泊まっていた家の主人である藺如賓に殺され、金を奪われた王蘭が、如賓の子供に転生し、財産を蕩尽した挙句若死にするという話である。本論は、「党氏女」の誕生をもって、討債鬼故事の成立とみなす。「党氏女」はその後多くの作品に影響を与え、模倣作を産み出していく。宋代には更に登場人物の数や転生回数が整理され、洗練されたかたちとなり、清代まで受け継がれる討債鬼故事の基本形が出来上がる。

「党氏女」と「阿足師」型の話と比較すると、前者は「転生」という仏教的な仕掛けを使用しながらも、復讐否定の思想は見られず、復讐を果たすための手段として転生が用いられている。一方「阿足師」とその類作は復讐が貫徹されない話であり、そのため小説としての面白みは薄く、筆記小説の世界では以後殆ど類似作を見ない。ただ、靈驗譚として流布し、庶民や非漢族にまで「転生して復讐する」という観念を知らしめたという点で重要な役割を果たしたと思われる。

また、畜類償債譚は、借金を踏み倒した者が、踏み倒された者の家畜に転生して返済するという話だが、「借りた金額と、返済した金額が一致する」という点では、討債鬼故事と共通するものがある。畜類償債譚における金額の一致という要素は、討債鬼故事の成立に先立ち、八世紀から現れている。

「第3章、偽経『仏頂心陀羅尼經』と討債鬼故事」

偽経『仏頂心陀羅尼經』は、『大藏經』未収經典であるが、討債鬼に関わる民間信仰を考察する上で、興味深い多くの問題を多く含んでいる。下卷第三話は、毒殺された人間が、来世で加害者の生まれ変わりの女性の子供に転生し、母親に苦しみを与えるが、観音菩薩の化身の僧によって済度されるというもので、前章で分析した復讐を否定する転生復讐譚の一例である。この經典は、討債鬼を避けるために信仰された一面があったことや、中国本土だけでなく周辺諸地域にも受容されたことから、討債鬼故事の伝播を考える上で重要な資料であるといえる。

従来『仏頂心陀羅尼經』は、唐代に敦煌で成立し、その後中国本土と契丹・西夏に広がったと考えられていたが、本論は、金石学資料の考察から、唐代に中国本土で成立した可能性が高いことを示す。

更に『仏頂心陀羅尼經』が印刷または石刻によって広められることに注目し、經典の末尾

に記された祈願文から、信仰活動の実態を考察する。特に紙本印刷の場合、祈願者は往々にして夫婦であり、子孫の繁栄を祈り、討債鬼の害に遭わないよう祈願する傾向がある。

「第4章、雑劇『崔府君断冤家債主』と討債鬼故事—討債鬼故事の転換点—」

討債鬼故事を題材とした雑劇『崔府君断冤家債主』（以下、『崔府君』と省略）を取り上げ、元代に生じた討債鬼故事の変化について論じる。まず、『崔府君』の成立した時代、属するジャンルについて基本的な考察を行い、元末から明初の作品であると結論づける。

『崔府君』は他の討債鬼故事とは異なり、主人公は冥府を訪れ、息子が討債鬼であると知ることによって、息子を失った悲しみから解放され、宗教に救いを求める。この型の話の祖形は宋洪邁『夷堅志』所収の「呉雲郎」に求めることが出来るが、この話の父は罪を暴かれたショックのため、救われぬままに死んでしまう。唐宋期の討債鬼故事では、討債鬼の父はあくまで極悪人として描かれたが、「子を失った父が救いを得る」という類型の出現により、父は読者の感情移入の対象へと変化したことを指摘する。

「第五章 冤家債主について」

本章では、『崔府君』の正名にもふくまれる「冤家債主」という語について考察する。この語ははじめ「怨家債主」と表記され、現実的な存在である敵と債権者を意味したが、やがて生者に仇をなす亡霊を指すようになる。「冤家債主」の一部は討債鬼と重なる意味合いで道教経典において用いられ、元代以降になると、個人的な怨恨を晴らす者だけでなく、天帝の命をうけて不当に財を持つ者の子に転生し、散財する者をも「冤家債主」と称するようになる。「冤家債主（討債鬼）」は、親にとっては身に覚えのない前世の借金を取り立てに来ることもあり、誰の身边にも現れるものとして恐れられ、人間に害をなす孤魂野鬼の一種とみなされて、宗教的鎮撫の対象となっていく。『仏頂心陀羅尼経』の印刷が、討債鬼の害を防ぐという目的で行われたのもその一例である。本論は、この恐れが、「父の視点に立った討債鬼故事」の成立を促したのではないかと仮説を立て、検討を加える。さらに、明代、清代、そして現代の討債鬼の父親像を追い、『崔府君』に始まる変化の意味を考察する。

「第6章 落語「もう半分」に見る中国怪談・討債鬼故事の受容と変容」

「もう半分」は、古典落語の演目の一つである。この噺の粗筋は、居酒屋夫婦に金を奪わ

れた老人が、夫婦の子供に転生して復讐するというもので、金銭をめぐる争いが発端になっていることから、討債鬼故事を受容したものと推定される。現在は子供が油を飲むという結末が定着しているが、明治時代には、石川鴻斎の漢文小説『夜窓鬼談』所収の「鬼児」と落語「正直清兵衛」という結末の違う話が存在していた。「もう半分」とこれら二つの類作をもとに、日本における討債鬼故事の受容を考察する。

「もう半分」とその類作において、子供はいずれも金を奪われた老人そっくりの顔に生まれて来て、両親を驚愕させる。そしてオニに変じたり、油を呑んだりというように、人間離れした異形の存在になっていく。

また老人が奪われた金は、娘が吉原に身売りして、父に与えた金であった。江戸時代には、公金を預かった旅人が殺されて金を奪われ、加害者の子供に転生する復讐譚が作られたが、中国の討債鬼故事では、預かった金を奪われ、仇の子供に転生するという例はほとんど見られない。一方日本で復讐の原動力となったのは、本来の持ち主や、身を犠牲にして金を作った娘に対して申し訳ない、という心情であった。日本における討債鬼故事の変容は、日本人の家族観や金銭観を反映して生じたものであり、翻って中国の討債鬼故事には、中国における家や家産、父子関係などの特性を見ることができるのである。